

は、経済学の分野に留まらず、ブリヤ＝サヴァランのガストロノミー全体を覆っている。

注

- 1) Brillat-Savarin, *Physiologie du goût*, Flammarion, 1982, p. 141.
- 2) *Ibid.*, p. 142.
- 3) Georges Gusdorf, *La conscience révolutionnaire: Les idéologues*, Les sciences humaines et la pensée occidentale, Tome VIII, Payot, 1978, p. 675.
- 4) 米田昇平、『欲求と秩序』、昭和堂、2005年、2頁、5-6頁、325頁。

Le beau Danube bleu

—1867年パリ万国博覧会におけるJ.シュトラウス二世の公演について—

倉 脇 雅 子

本発表では、ヨハン・シュトラウス二世（Johann Strauss II, 1825-1899）による、1867年のパリ万国博覧会における《美しき青きドナウ》*Le beau Danube bleu*（1866-1867）公演を手掛かりとして音楽作品がその名声を得る経緯とそれに伴う社会的な役割について考察した。

J.シュトラウス二世による、《美しき青きドナウ》は、現在、ポピュラーなクラシック音楽として知られているが、このような名声を博す契機となったのは1867年のパリ博でのシュトラウス指揮による公演であった。

パリ博での公演が実現に至ったのは、1867年にシュトラウスをパリ社交界に紹介した、当時のパリ駐在のオーストリア大使である、リヒャルト・クレメンス・フォン・メッテルニヒ（Richard Klemens Fürst von Metternich-Winneburg, 1829-1895）の妻であるパウリーネ（Pauline von Metternich, 1836-1921）に負うところが大きい。

1866年ウィーンで、シュトラウスはパリ博での公演を実現するための布石として、パウリーネに対して《ウィーンのボンボン》*Wiener Bonbons* Op. 307（1866）の作品献呈を行った。このような親交を経て、パウリーネは、フィガロ紙の主幹であるイポリット・ド・ヴィルメサン（Hippolyte de

Villemessant, 1812-1879) にシュトラウスを紹介した。彼はシュトラウスによる、《美しき青きドナウ》を含む公演の記事を、全国紙であるフィガロ紙上で、1867年7月26日から5回記事に取り上げた。加えて、8月1日にはシュトラウスがヴィルメサンに献呈した《フィガロ・ポルカ》*Figaro-Polka* Op. 320 (1867) について特集記事を組んだ。

また、パリ博以降、シュトラウスは親善や外交を目的とした大規模公演での演奏機会を得るようになった。1872年にボストンで開催された「アメリカ独立100年祭」や1873年のウィーン万国博覧会プラター本会場での成功は、パリ博の成功を国内外に伝えたヴィルメサンの記事が一端になっていると捉えられる。そして、これらの半公共的な演奏機会において、《美しき青きドナウ》が度々演奏されることで本作品が定番化されていった。この定番化を促した要素を演奏形態からみると、オーケストラによるシンフォニック・ワルツおよび合唱を挙げることができる。

1866年初版のヨーゼフ・ヴァイル (Josef Aloys Peter Weyl, 1821-1895) の歌詞は普墺戦争 (1866) の敗北からの再興を願う励ましが込められていたとされるが、実際にはシュトラウス自身が本曲をシンフォニック・オーケストラ (純器楽曲) として演奏することで好評を得ていった。その一方で、フランスでは劇作家のジュール・バルビエ (Paul-Jules Barbier, 1825-1901) が歌詞づけを行うと、この合唱譜が販売部数を伸ばし、フランスから欧米に輸出されることで広く知られるようになり、次第に作品が政治的メッセージを重視するものよりも、ロマン主義的な性格をもつものに移行したことでポピュラー音楽として認知されるようになった。そして、フランツ・フォン・ゲルネルト (Franz Edler von Gernerth, 1821-1900) のウィーン改定版 (1890) においては、美しい自然と平和への願いを内容とした「第二の国歌」といわれるような普遍性をもつ作品とみなされていった。

本発表で取り上げた《美しき青きドナウ》の受容とその変遷からは、シュトラウスの三つのストラテジーが明らかとなった。第1は、政治・外交ルートにおける人脈形成である。ここでは作品献呈をつうじたパウリーネをキーパーソンとする外交的な人脈形成が試みられ、パリ万国博覧会を舞台として、スポークスマンとしてのヴィルメサンの協力と海外の要人とのコネクションを獲得した。シュトラウスは、政治・外交の舞台での接遇をオーストリア帝室・王室宮廷舞踏会監督としてその役割を果たすとともに自身の音楽活動の領域を広げていった。第2は、メディア戦略である。パリではフィガ

口紙のヴィルメサンを、ウィーンでは *Neue Freie Presse* の文芸欄執筆者であるエドゥアルト・ハンスリック (Eduard Hanslick, 1825-1904) を味方につけることに成功している。これは、都市での論調を左右する彼らの記事が国内外で掲載されることを考慮したものであろう。第3は、楽譜出版における連鎖的な需要の掘り起こしである。演奏会場でシンフォニック・ワルツとして《美しき青きドナウ》を演奏することは、家庭や室内でのピアノをはじめとする楽器演奏や歌唱のために編曲された楽譜の出版部数の増加および楽器製造産業の興隆に影響を与えた。

このように大規模演奏会におけるシュトラウスの存在とその音楽は、社会的役割の一端を担うものであった。当時のメガ・コンサートの音響的環境は、必ずしも純粋に聴取できる場所ではなく、むしろ音楽は何万人もが集まり祝祭的高揚をつくる媒体と捉えられる。しかし、万国博覧会や平和の祭典という大舞台においてシュトラウスの民間外交が開花したのは、このような音楽の祝祭的な側面も取り込んだ結果といえるだろう。

参考文献

“L'exposition.” *Le Figaro*, juillet 26, 1867, 2. <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/cb34355551z/date1876> (2024年1月30日アクセス)

Ducuing, François, *L'Exposition universelle de 1867 illustrée : publication internationale autorisée par la Commission impériale*. Vol. 2, Paris: Bureaux d'Abonnements, 1867.

Crittenden, C. (2006). *Johann Strauss and Vienna : operetta and the politics of popular culture*. Cambridge University Press.

※本発表は、JSPS 科研費 23K12061 の助成を受けている。